

# 十年の歩み

国文学研究資料館





新館南面



新館建築前

## 序にかえて

国文学研究資料館が設立されたのは昭和47年5月で、本年は創立後十年に相当する。この機会に何か記念になることをしようではないかと、かねてより話合われていたが、計画が具体的になったのは今年の4月からであった。このささやかな記念冊子の刊行はその一つである。

十年とは一つの区切り、ここにおいて過去を振り返り、将来の指針とすることは、意義あることというべきであろう。ことに当館の設立は国文学研究者の総意に基づき、その結集しての要望が各方面の人々の絶大なる協力を得て実現したものであって、その設立までの経緯は銘記すべきである。また設立後の活動も、もとより館員を軸としてであるが、多くの人々の支援によって進められて来たものである。それは、何分にも新しい仕事であり、かつ関聯する面が多岐にわたるため、種々な点でいわば試行錯誤を重ねざるを得ないこともあった。その過程を記録にとどめておくのは必要なことであると思う。

幸に、創設に関与された方々、設立後の当館の活動に何かと御援助いただいた方々、当館をあたたく見守って下さっている方々、旧職員の方々など多数の御寄稿を得、座談会や市古前館長へのインタビューを含めて、充実した内容になったことは感謝の至りである。急な御依頼にもかかわらず、玉稿をお寄せいただき、また座談会に御出席下さった方々に、あつく御礼申し上げる。

当館の活動の現状は、「事業活動の歩み」や「資料」などを御参照いただきたいが、概略以下のごとくである。まず文献の調査・収集・整理・保存・閲覧。原則として江戸時代末までの国文学関係の文献を、公私の所蔵者各位の好意により、多数の文献資料調査員の協力を得て調査し、これを主としてマイクロフィルムによって収集、整理して長く保存の道を講ずるとともに、昭和52年7月の開館以降、原資料所蔵者の許諾を得たものは、ポジフィルムまたは紙焼写真で研究者一般の閲覧に供し、複写サービスに応じている。毎年『マイクロ資料目録』を刊行、現在、調査は10万点を越え、収集は5万点に達した。近時、海外に存するこれら文献の収集にも着手している。

次に研究情報の収集・整理・保存・閲覧。雑誌・紀要の類に発表される論文や単行本などの研究情報を一年単位で整理編集し、『国文学年鑑』として刊行している。単行本を数多く備えることはできないが、雑誌・紀要類の収集に努め、これは公私機関の協力を得て漸次充実し、昭和57年刊『年鑑』採録の55年度論文約6,000、その収載誌は月刊誌も1点と数えて約800点、そのうちの約770点を所蔵するに至った。これらは閲覧や複写サービスによって多くの人々の研究に寄与している。

電算機の当館への搬入は昭和52年12月末であった。もとよりそれ以前より研究を重ねていたのであるが、比較的短日月でシステムの開発が行なわれ、前記『マイクロ資料目録』や『和古書目録』などの作成に利用しているほか、資料管理システムも運行している。目下、研究情報も着々と入力中であり、蓄積されたデータベースによってやがてオンライン検索が可能となるはずである。その他、国文学研究のために電算機がいかに利用できるかをさまざまな面で検討中である。

海外の日本文学研究者と交流をはかることも当初から考えられていた。昭和52年度より外国人研究員を毎年1名迎え、また同年秋より国際日本文学研究集会を開催している。国際交流基金や日本学術振興会のフェローの受入れもしだいに増え、当館の存在は海外でかなり知られて来た。ついでながら、公開講演会を定期的に催しており、開館前は都内各所で、開館後は館内において展示も併せて行なっている。近年、東京以外でも開催することにし、ひろく国文学の普及に努めている。

以上、主として当館の研究者一般へのサービス業務について述べた。文化遺産の保存とその活用が当館の大きな目的であるから、これは大切な仕事である。もとよりこれらの活動はその基礎に研究を必要とするが、一方、当館は研究機関であり、研究者は各自専攻の分野での研究にも従事している。大学院教育への協力、内地研究員などの受入れは、この面での働きである。館員と外部の研究者との共同研究は、これまで解題研究に成果を挙げ、目下、適当と考え得る他のテーマをも取り上げつつある。

史料館においては、昭和22年以降、近世の史料(文書・記録)を中心に収集し、現在約50万点を所蔵している。これらを整理して『所蔵史料目録』を逐次刊行中であり、また研究者の閲覧に供している。所蔵重要史料の翻刻刊行、全国各地に散在する近世史料の所在調査、各種機関で編集した目録の収集(現在、1,500タイトル・3,000冊)などもその事業であり、また近世史料の古文書学的研究が続けている。昭和27年より近世史料取扱講習会を毎年催して、この方面の知識技能の啓発普及に努めて来た。

十年の歩みの結果は以上の通りである。たまたま本年4月に市古前館長のあとを承けた者として、これらを継続して一層の発展をはかってゆきたいと念じている。もとより、「座談会」その他でも触れられているように、さらになすべきことや検討すべき問題点も多々存する。当館の活動はひろく研究者一般のためのものでなければならない、という基本方針を堅持して、住することなく前進してゆこうと思う。今後ともかわらぬ御支援をお願いする次第である。

筆末ながら、本冊子に御協力賜った方々に重ねて御礼申し上げ、また短時日にこれをまとめ上げた編集委員会(委員長 福田秀一教授)の諸氏、資料を整理して執筆に当たった館員一同の努力に感謝の意を表する。

昭和57年9月

国文学研究資料館長

小 山 弘 志

# 目 次

序にかえて	小山 弘 志	
創設十周年を祝す	小 島 吉 雄	1
国文学研究資料館創設十周年を迎えて	石 井 良 助	2
市古前館長に聞く(インタビュー)		3
1. 創設まで	3	
2. 設立から運営へ	10	
3. 開館から充実へ	13	
終りに	23	

国文学研究資料センター(仮称)設置についてのお願い (設立推進連絡協議会配布文書)	5
敷地の由来	8
設立関係新聞記事(45年12月3日 東京新聞“政界手帳” 同年12月29日 毎日新聞)	9

## 回想・提言 I

繋ぎのための仕事をして	松 尾 聰	25
創設までのおもひ出から	白 田 甚五郎	26
国文学研究資料館創設のころ	古 川 清 彦	27
国文学研究資料館の設立を回想して	渋谷 敬 三	28
国文学研究資料館の設立について	古 市 正 俊	30
国文学研究資料館の設計について	鈴木 昭 治	31
十年の歩み	佐 藤 喜代治	32
国語国文学界と国文学研究資料館	山 口 正	33
アカデミーとしての国文学研究資料館	松 田 智 雄	34
史料館の役割について	寶 月 圭 吾	36
雑 感	鈴木 壽	37
十年をふりかえって(座談会)	井上 宗雄・今井 源衛・松田 修 吉野 幸夫・渡邊 章他 (司会)福田 秀一	38
1. 創設のころ	39	
2. 事業のスタート	46	
3. 開館準備期	49	
4. 開館以後	60	
5. 資料館の現在から将来へ	68	

宿直の変遷 .....	39
国文学文献資料の総点検(46年7月18日 読売新聞“学界往来”).....	44
あのころのこと .....	山城 玲 子..... 51
史料の引越し .....	52
民族資料の民博への移管 .....	中 村 俊 亀 智..... 53
国文学研究資料館への提言 .....	平 林 盛 得..... 56
シンボルマーク制定の由来 .....	60
オンライン検索の現状 .....	73

## 回想・提言II

国文学研究資料館十周年に寄せて.....	秋 山 虔..... 81
設立準備のころ.....	橋 本 不 美 男..... 81
調査員・収集計画委員として.....	樋 口 芳 麻 呂..... 82
国内も国外も.....	佐 竹 昭 広..... 83
共同作業のたまもの.....	石 綿 敏 雄..... 83
偶 感.....	松 尾 葦 江..... 84
国文学研究資料館と私.....	ドナルド・キーン..... 85
The Happiest Time I Have Ever Spent in Japan.....	D. E. Mills ..... 86
海外の図書館から.....	金 子 英 生..... 87
会員制情報誌刊行のすすめ.....	檜 谷 昭 彦..... 88
終身之計を望む.....	信 多 純 一..... 88
国文学研究資料館への提言.....	藤 平 春 男..... 89
歴史史料保存・利用体制と史料館.....	西 垣 晴 次..... 90

## 事業活動の歩み／回想・提言III

1. 管 理 運 営.....	91
在任時の回想.....	杉 山 重 行..... 97
雷魚のこと.....	和 田 英 道..... 97
2. 文献資料調査.....	99
東北地方における調査十年の成果.....	片 野 達 郎..... 107
主客交替の弁.....	新 藤 協 三..... 108
3. 文献資料収集.....	110
大学図書館蔵書の収集を.....	日 野 龍 夫..... 114
4. マイクロフィルム・プロセッシング.....	115
マイクロフィルムからコンピューターへ?.....	石 井 啓 豊..... 120
5. 年鑑編集と研究情報収集等.....	122
研究文献目録屋の弁.....	久保田 淳..... 124

目録——作成する側から——	末 沢 明 子	125
6. 情報検索システム開発		126
税が上がる(?)システム開発	石 塚 英 弘	133
「漢字」は「漢字」で	星 野 雅 英	134
7. 目 録 作 成		136
カタログिंगのことなど	永 田 治 樹	143
マイクロ資料目録作成に携わって	土 田 節 子	143
8. 利用サービス		145
一地方在任者のやや強迫的つぶやき	中 野 三 敏	148
国文学研究資料館における研究情報の充実度	村 上 學	149
9. 参考業務と普及活動		151
初期の展示室	内 田 保 廣	153
10. 共 同 研 究		154
共同研究に参加して	中 野 沙 恵	158
11. 大学院教育協力と内地研究員等受入れ		159
内地留学第一号のこと	藤 本 一 恵	160
12. 国 際 活 動		162
国際日本文学研究集会のこと	奥 出 健	164
13. 史 料 館		166
史料整理に従事して	大 藤 修	179
近世史料所在情報の整備	山 田 哲 好	179
資 料		181
I 創設・開館関係(資料1～6)		185
II 事業一覧(資料7～16)		205
III 名 簿(資料17～23)		274
IV 参考法令(抄)(資料24～26)		288
年 表		295
あ と が き		307